

教室内にチャイムが鳴り響くと同時に、佐々木先生はペンを置いた。

「これで授業を終わります。ありがとうございました」

一礼すると、ホワイトボードの板書を消し始めた。一日の仕事を終えた先生の背中にはくたびれているように見えた。ほんとうに疲れているのだろう。産休を終え、職場に戻ったあとの先生の頬は、見るたびに痩せ落ちていく。

ここ、佐々木塾は中学生を対象に、学校のテスト対策や受験勉強を教えている個人塾だ。経営者である佐々木先生と、そのほか二、三人の講師が交代で教鞭をとっている。

初秋から休みに入った佐々木先生は、仕事に穴を空けるわけにはいかなかったのか、わずか三カ月ほどで復帰した。小さい子どもがいるのに、こんな深夜まで働かなければならない。塾講師というのは大変な仕事だ。

「慎司、なにボーっとしているんだい」

後ろの席に座っていた岡崎が、俺の肩を叩いた。

振り返った俺を見ると、なぜか目を細めて、耳元に近づいてきた。

「慎司さあ……、佐々木先生が気になるのはわかるけど、人妻なんだよ。わかる？　結婚してるの。しかも子どもがいるの」

「そんなじゃねえよ」

手で岡崎の顔をはらうと、今度は声をあげて笑った。

「はは、慎司、マジにならないでよ。それよりさ、まだ帰らないの？」

「ああ、帰るけど……隣、授業終わってるかな」

隣の教室では、ひとつ上の学年、三年生の授業があった。受験を目前にひかえる十二月だから学ぶことが多いのか、よく授業が延長される。

岡崎は廊下から首を伸ばして、隣の教室を覗いた。

「まだ終わってないみたい」

「そうか」

「仕方ないな、付き合ってあげるよ」

岡崎はそう言うのにやりと笑った。

お節介だな、とツツコもうとしたが、一人で待っているのも退屈だ。それに友人の親切心を台無しにするのは良くない。……もつとも岡崎は、高坂と喋りたいだけだろうが。

外へ出ると、頬を切るような冷たさの風がビルの隙間を吹き抜けていた。先週ようやく、俺のクローゼットのなかで最も厚手のコートを出したが、それでも凍えそうな気温だ。

「さむっ。もうこの時間に帰るのがいやになる季節だな」

「岡崎は手袋してるからマシだろ」

自分の両手を擦りあわせながら言う。すると岡崎は、もこもこの手袋を装着した手をブンブンと振り回した。

「いやいや、手袋なしで自転車に乗ってごらんよ。ほんとうは覆面を被りたいくらい寒いんだから。電車通いの慎司にはわからないだろうね」

駅前のロータリーを曲がったところに、岡崎が利用している自転車置き場がある。岡崎はそちらへは行かず、俺の後をついて駅の改札口まで来た。ここなら風が凌げるし、さっきまでいた雑居ビルの入口が見える。佐々木塾は、この二階にある。今のご時世に、携帯電話も持っていない人間を待つのは、この場所が最適なのだ。

二人して、黙って雑居ビルを見上げていたが、沈黙に耐え切れなくなった岡崎が口を開いた。

「高坂瞳、外見があんなに美しいのに、成績までいいなんて神様のえこひいきだよね。先月の模試でも一位だったらしいよ」

「へえ」

「素っ気ないなあ。慎司なんかあの人と一緒に帰れるなんて、いまだに信じられないよ」

慎司なんかとは何だ。と言う代わりに、岡崎の腹を小突いた。

「痛っ。……いや、学校のみんなも不思議に思ってるよ。どうして慎司が高坂瞳と親しいんだろうって。参考にするから教えてよ。何があったの？」

「なんともねえよ。ただ幼馴染なだけ」

岡崎は納得したのかしていないのか、ふうんと頷いた。

「まあ、慎司が想いを寄せているのは佐々木先生だもんね。その点安心できるよ」

もう一度腹を小突こうとすると、岡崎は急に身をひるがえした。

「高坂さん！」

岡崎が手を振る先を見ると、白のダッフルコートに身を包んだ高坂が早足でこちらへ来ていた。

「寒いなか待たせてごめんね」

「いやいや、全然問題ないですよ。高坂先輩こそ遅くまで大変ですね」

岡崎は間拔けな顔で言った。ふだん「高坂瞳」とフルネームで呼んでいる岡崎が、本人の前では「先輩」という敬称をつけるのは、同じ学校だからという遠慮があるのだろう。

「先輩すごいですね。また模試で一位だったって。先生たちもきつと先輩に期待してますよ」

「どうもありがとう。……でもなんで知ってるの？」

「ほかの三年生に聞いたんですよ。さすが先輩です」

「はあ……」

岡崎のくだらない世間話を聞きながら、高坂がちらちらと目配せをしてきた。あまりに露骨なので、それに気づかない岡崎のほうに驚いてしまう。

「……立ち話はこれくらいにして、そろそろ帰るぞ」

「ん、そうだね。じゃあまた明日」

岡崎は意外にもあっさりと言をやめて、自転車置き場のほうへ駆けていった。寒すぎたのかもしれない。

ズボンの尻ポケットから財布を取り出す。高坂も、バッグから定期券入れを取り出した。改札を通過し、プラットホームへと続くエスカレーターに乗る。

「……何か言いたいことがあるんですか」

目の前の背中に向かって訊くと、高坂は勢いよく振り返った。

「どうしてわかったの？ さすが慎司くん。まるで心を読めるみたい」

あんな様子で何もないほうがおかしいだろう。それにしても、ここまで大げさに褒めてくるということは、面倒な……、過大な要求をしてくるに違いない。じつと身構えた。

「すぐくびつくりしたニュースがあったのよ。びつくりしたニュース、略してビツクニュース」

なぜか人差し指を立てて、声高らかに言う。俺は浅いため息をついた。

車内に入ると、暖房がよく効いていて、逆に暑いくらいだ。二人並んでつり革を掴む。目の前にはスーツを着た女性が、抱きかかえた赤子の身体を揺すってあやしている。その隣に座るサラリーマンは、母子の声を鬱陶しそうに身体を反らしている。サラリーマンにも同情するが、やはり母親は辛そうだな、と佐々木先生を思い浮かべた。

「……で、そのビツクニュースって？」

母子から目を離し、横にいる高坂に目を向ける。高坂は神妙な面持ちで口を開いた。

「山内先生が、時計を右腕につけてるの」

は？ と返したくなるような語り出しだったが、とりあえず最後まで聞いてみることにする。

「ふだんは左につけているんだけど。先週まではそうだったのに、ここ数日は違ったの」

山内先生は男性の講師で、数学を教えている。二年生の担当になったことがないので、俺自身は直接の関わりがない。だが高坂の話題にしばしば登場するので、一応認知はしている。同じ塾にいるのもちろん何度も見たことはある。若すぎも老けすぎでもない、おそらく三十代後半といったところだろう。快活な佐々木先生と対照的に、陰鬱そうな雰囲気をもっている。高坂はそれを、アンニュイと呼ぶ。

「ええと、山内先生は右利きなんですか？」

その質問に、高坂は深く頷いた。

「少なくともペンを右手で持ってる。だから右腕につけた時計を邪魔そうにしてて、それが気になって……」

「時計は以前と変わっていましたか？」

「変わっていないと思う。黒くて大きめの腕時計」

よく覚えているな。高坂の記憶力には感心する。さすが模試トップ。

それとも憧れの人が身につけている時計くらい、ふつう覚えているものだろうか。俺も誰かの時計を思い出そうとする。……が、何も浮かばなかった。

電車が減速し始めた。そこは俺たちの最寄り駅なので、ドアのほうへと進む。停車しドアが開くと、またもや冷気が吹き込んできた。俺の任務は家に帰るまで続く。任務というのは、塾帰りの高坂を傷一つなく我が家の隣家まで送り届けることで、我が母から仰せつかったものだ。お隣さん同士である俺たちは家族ぐるみで親しく、幼いころは姉弟のように育てられた。小学校入学前までは「瞳ねえ」と呼んでいたが、それを岡崎が知ったらどんな顔をするだろうか。

ホームに降り立ち、改札のある二階へと延びる階段を昇る。先に昇りきった高坂は、下にいる俺の顔を覗き込むようにして言う。

「つまり慎司くんに、先生がどうして時計を右腕に変えたのか考えてほしいの」
どうして慎司くんに頼んだのかわかってるよね、とでも言いたそうな顔だ。

そんなに時計をつける位置が気になるだろうか。疑問に思いながら、「なるほど」と相槌を打つ。

「左腕にケガを負っているとか？」

「それはない」

即答される。もっとマジメに考えろ、と言われていたようだ。俺はため息をついた。

右利きの人が右腕に時計を付け替えるというのは、余程の理由がなければやらないだろう。高坂が言ったように、書きものをするのに邪魔である。また時計を左手で付け外ししなければならない。山内先生がどんな性格の人なのかよく存じ上げないが、気まぐれでは変えないだろうし、もし気まぐれで試したとしても、違和感に耐え切れず一日でやめてしまうのではないか。毎日塾に通っている高坂の話だと、ここ数日間が続いているようだ。なんらかの理由があると見てよいと思う。

なんらかの理由……時計が右腕にあったほうが良い状況とは。

「まわりに気づかれないように時計を見るため、ですかね。利き腕につければ、板書の動作とかで自然と目に入ってくるんじゃないかな」

「ふつうに時計、見てるよ」

「またもや即答。これもハズレか……」

再度ポケットに手を伸ばして、財布を取り出す。そのとき、俺の脳裏に閃くものがあった。

「ああ、そういうことか」

「わかったの？」

俺に続いて改札を通った高坂が問う。俺は頷いた。

「スマートウォッチ、ご存知ですか？」

案の定、高坂は首を傾げる。今のご時世、携帯電話も持っていない高坂は、電子機器に疎い。ほかの人が見たらそれだとわかりそうなものだが、高坂はふつうの時計と判別がつかなかったのだろう。

「その、スマート……なんとかっていうのが関係あるの？」

スマートウォッチの解説をしていたら長話になりそうだから、ここは手短に済ませよう。おそらく同年代の高坂より、母にこの説明をするほうが簡単だ。

「スマートウォッチ、です。ただの時計ではなくて、交通系ICとして使えるんです。ああ、交通系ICっていうのは、いま手に持っているSuicaとかです」

高坂は握りしめていた定期券入れを見つめる。

「改札を見てください。Suicaをタッチする部分、すべて右についていますね？」

そう言いながら、来た道を振り返る。さっきの電車で目の前にいた母子もここが最寄り駅だったらしく、ちょうど改札を抜けていた。抱きかかえた赤子の足が左右に広がっているので、やや窮屈そうに通っている。

その様子をしげしげと見ながら、不思議そうな顔をした高坂が頷く。

「右利きの人はふつう左腕に時計をつけますね。それがスマートウォッチの場合、改札を通るときは身体をひねって右側に腕を持ってこないといけない」

だから山内先生は時計を右腕にしたんです。そう締めくくろうとしたが、高坂の表情を見て、口をつぐんだ。眉をひそめ、首を傾げている。どう見ても腑に落ちない様子である。

果然としている俺に気づいて、少し困ったように笑う。

「ああ、ごめん。理解できなかったわけじゃないよ。わたしもそこまでバカじゃないし」

学年トップのセリフではないだろうと言いたくなるが、たしかに高坂は頭のまわる人ではない。小学生までは勉強ができるタイプでもなかったから、いま学校や塾で成績優秀と言われているのが意外である。本人は言わないが、憧れの先生のために努力しているのだろう。

いや、いまはそんなことはどうでもいい。高坂が何に納得がいかないのか、だ。「どうしました？」

「スマートウォッチ、っていうのを改札で使うのに右腕につけたほうが、都合がいろいろというのはわかったし、いい着眼点だと思う」

高坂は慎重に切り出した。

「でもね、さっきも言ったけど、先生の時計は変わっていないんだよ」

「最近この機能を使いはじめた……、とか？」

「それも考えられるけど、不便なのは改札を通るときだけだね。授業をしているときのほうがもっと邪魔なのに、それでも右腕につけるかな」

「……右腕につける理由が弱いと？」

高坂は頷き、俺は唸った。高坂の言うことは正しい。

山内先生の時計がスマートウォッチであると仮定して、さらに考えてみよう。右腕につけるほうが便利だという程度ではなく、右腕につけなければならない理由があるだろうか。

寒い。寒いので、立ち話をするのもそろそろ厳しくなってきた。それに帰りがあまり遅くなると、母上の逆鱗に触れてしまう。変な誤解はされたくない。高坂に、とりあえず歩きながら考えましよう、と前進を促す。

タイムリミットは、自宅に着くまでだ。それまでに高坂を納得させるものを用意すればいい。俺が言うことがべつに事実である必要はない。これは推論なのだから。

「左腕に時計をつけたら改札を通るときに不便、っていうのはほんとうにいい考えだと思うよ。それが授業中の不便さを超えるくらいだったら、右腕につけるんじゃないかな」

やや早足で、黙り込む俺に気を使ったのか、わざわざフォローを入れてきた。授業中を超える不便さ、か……。

「両手に大きな荷物を持っていたら、腕をあげるのは大変ですよね」

一瞬間をおいて、さらに根拠を付け加える。

「最近は厚手の服を着ているから、余計に身動きも取りづらい」

「たしかに。でも先生のカバンはリュックだったかな」

どうしてそこまで把握しているんだ。高坂の情熱は、もはや感服してしまうレベルだ。

まあ、日常的に大きな荷物を、しかも両手で持っていることは考えにくいだろう。改札をスマートウォッチで通り抜ける動作をやってみる。通りすがりのサラリーマンが怪訝そうに俺を見たが、気にしないことにする。

「両手でなければ……、前に大きな荷物があるというの？」

「前？」

高坂はきょとんとした顔をする。

リュックは背中にあるから邪魔にならないが、さらに腹のほうに何かあれば、腕を反対側に通すのは難しいだろう。そうだな、前に抱えるものといえば、例えば赤子……。

「あ」

思わず声が漏れる。

「わかったの、慎司くん？」

高坂が俺の顔を覗き込む。顔を上げると、見慣れた交差点があった。ここを曲がり、数分も歩けば自宅がある。

「いや……もう少し考えさせてください」

同じ電車に乗った母親が頭に浮かぶ。赤子を抱えた母親は、かなり窮屈そうに改札を通っていた。あんな状態で、左腕につけたスマートウォッチをかざすのは困難だろう。

山内先生に赤子がいるとすれば、同時に、佐々木先生の顔が浮かぶ。

まさか、そんなはずは。その可能性を否定したいところだが、いや、同じ職場の人間だ。まったく不自然ではないだろう。佐々木先生の産休の時期を考えても、丁度いいくらいだ。辻褄が合う。大手なら、こういう場合異動になるのだろうが、佐々木塾は個人経営だ。この推論はおかしくない。だが……。

前方には自宅が見える。もちろん、その隣の高坂家も。タイムリミットが近い。高坂もそう思ったのか、詰め寄るように俺に近づいた。

「慎司くん。山内先生は、なにを前に抱えているの？」

高坂の口からはき出される白い息が顔にかかるほどの距離にいる。

これは推論であり、事実とは限らない。だからそんなに責任を感じなくていいのだ。だが……この推論は、高坂を傷つける。

「慎司くん？」

目と鼻の先にある大きな瞳が、街灯に照らされてきらりと光る。誰よりも見慣れた顔だが、さすがにここまで寄られるとたじろいでしまう。

しばらくの沈黙の後、口を開く。ひどく緊張していて、口のなかはカラカラだった。

「……子ども、の可能性が高いと思います」

意外にも高坂の最初のリアクションは、驚きでも涙でもなく、大きなため息であつた。

「……やっぱり相手は佐々木先生、なのかな。お似合いだと思っていたし」

やっぱり、ということは二人の先生の関係に薄々気づいていたのだろうか。女の勘、というやつか。だから時計の位置が変わった、という些細な変化にも敏感に反応したのかもしれない。

高坂の反応を確認してから、さらに言葉を続ける。

「二人とも夕方から深夜まで同じ職場で働いているから、近くの託児所にでも預かってもらっているのではないでしょうか」

「なるほどね。仕事終わりに子どもを引き取って、電車に乗って帰ろうとしたら、改札を通りづらかったのか」

「まあ憶測ですけど」

「立派な推測だよ」

高坂は再び大きく息を吐いた。白い息で、一瞬顔が隠れる。

「そっか……ちよつと残念だけど、スッキリしたよ。とにかくありがとう」

高坂は無理に口角をつり上げた。

「じゃあ、また明日」

ひらひらと手を振って、自分の家へ入っていった。その扉が完全に閉まるのを見届けてから、俺も自宅のほうへと向かった。

事実はまったく違うのかもしれない。明日、山内先生の時計を確認すればわかることだ。だけど、俺も泣きたい気分だった。